



150

特集

りんご植栽150周年
NEXT100
ありがとう弘前りんご

りんご植栽
150周年記念
たか丸くん
りんごバージョン



令和7年は、

青森県にりんごが植えられてから 150 周年

弘前市は市町村別農業産出額の果実部門で10年連続日本一となるりんごの一大産地ですが、現在に至るまでには、先人たちのたゆまぬ努力がありました。

今回は、弘前市のりんご産業の歩みについて紹介するとともに、担い手が減少する中で、次の100年(NEXT100)を目指して、これからのりんご産業を支えていく若い世代にインタビューしました。

■問い合わせ先 りんご課 (☎40-0482)

弘前りんごの歩み

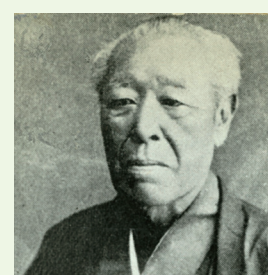
いま私たちが食べているりんごは、

明治時代に日本に渡ってきた「西洋りんご」

明治の初め、東奥義塾の教師として弘前に招かれていた外国人宣教師ジョン・イングが、生徒らにりんごを振る舞ったことが、青森県に初めて西洋りんごのおいしさを伝えるきっかけになったといわれています。



ジョン・イング (1840～1920)
前列左から3人目



菊池楯衛 (1846～1918)

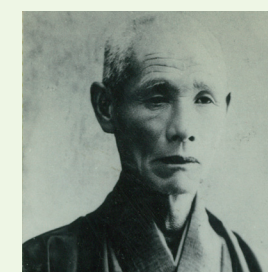
国を豊かにするために海外からさまざまなものが取り入れられ、その一つとして、西洋りんごの苗木が全国に配られました。

青森県にりんごが初めて植栽されたのは明治8年

ちょうどその頃、時代が変わったことで、職を失った武士が大勢いました。「青森りんごの開祖・始祖」といわれる菊池楯衛は、元武士達を中心にりんごを試作させ、栽培技術を広げて、一大産地となる基礎を作りました。

りんご栽培は病虫害との戦い

明治中・後期には、病虫害の発生により、りんご栽培に危機が訪れました。外崎嘉七は、樹形改造や袋かけにより病虫害からりんごを守る技術を考案し、ボルドー液(農薬)散布などの普及にも努め、りんご危機克服の号令者といわれています。



外崎嘉七 (1859～1924)

昭和中期になると、他の果物の増産や輸入などにより、それまで主力品種だった「紅玉」「国光」の価格が大暴落し、山や川に大量に投棄されました。

価格暴落を機に、品種の更新が進む

「ふじ」の栽培に力を入れていた齊藤昌美は、希望者に枝を分け、「ふじ」が広まるきっかけを作りました。その後、「ふじ」は、食味の良さが消費者に受け入れられ、りんご産業全体を救ったとされています。



齊藤昌美 (1918～1991)

このように、病虫害被害や価格暴落に加え、平成3年の台風19号(りんご台風)による自然災害など、さまざまな困難がありましたが、先人たちの技術普及とりんごに対する情熱で苦難を乗り越え、日本一の産地としての地位を確立しました。



台風19号による被害